宇都宮市市政研究センター「学生によるまちづくり提案」

いつもここから音楽を♪

―Linking Park（仮称）の設置―

宇都宮大学　中村祐司研究室

川端さやか　大橋友梨　斉藤久恵　中澤浩子　加藤大輔

―目次―

１．　問題意識

２．　現状分析および問題点の確認

(1)ジャズのまち委員会の活動から見る現状

(2)ジャズ関係のお店の現状

３．　提案

(1)提案理由

(2)施設内容

(3)期待できる効果

(4)具体的な理想イメージ

(5)課題

４．　結びに

１．問題意識

宇都宮市ではジャズを文化資源としたまちづくりを行なっているが、実際、市民や市外の人にとって宇都宮＝ジャズという認識ができる状態であるかというと、そうは言えないだろう。その理由の一つとしては、2004(H16)年の宇都宮市観光動態調査による宇都宮ジャズの認知度の低さがある。その調査結果によると、宇都宮が餃子のまちであると答えたのは調査対象の 90%であったのに対して、ジャズのまちと答えた人はたったの 6%である。

渡辺貞夫クラブ、宇都宮観光コンベンション協会、ジャズ協会からなるジャズのまち委員会が先導となって街角ライブやジャズセミナー、展示会を行なっているが、一向にジャズが浸透してきている感じは受けない。調査結果からもそのことは明らかである。市外の人たちに宇都宮のイメージとして定着している餃子においては、宇都宮市民自身においても宇都宮＝餃子という認識があると言えるだろう。それに対し、市外のほとんどの人に伝わっていない宇都宮ジャズは宇都宮市民においても同様に、宇都宮＝ジャズという認識はできていないに等しいと考える。

このことに対する問題点として、ジャズのまちと謳えるほどジャズへ触れる機会や場所が多くはないこと、ジャズのイベントなどの情報の発信がスムーズに行なわれていないこと、市民からの自発的な活動への参加がみられないことなどを挙げたい。これらのことをすべて解消できれば、少なくとも今以上にジャズのまち宇都宮ということを市内外ともに認識できるようになると考えられる。その中でも今回私たちは、ジャズへ触れる機会や場所が少ないことを一番の問題として取り上げ、よりよいジャズによるまちづくりを進めるために、提案していきたいと思う。

また、私たちがジャズとしてとらえる音楽とは、宇都宮市のジャズの定義にのっとったもの、つまり、クラシック以外の音楽すべてであることを前提とする。

２．現状分析及び問題点の確認

ここでは①ジャズのまち委員会が行なっている活動、②ジャズ関係のお店の現状、という二つの観点から、市民がジャズに触れる機会、場所の現状について分析し、具体的な問題点を割り出していく。

(1)ジャズのまち委員会の活動等から見る現状

ジャズのまち委員会は、ジャズのまち宇都宮をブランド化するために 2001(H13)年に立ち上がった任意団体で、市と民間が共同で運営を行なっている。2005（H17）年度事業内容としては、ストリートジャズライブ、ミヤジャズインなどの鑑賞型事業、参加型のミヤ

ストリートギグ、育成型のふれあいジャズセミナー、渡辺貞夫氏の顕彰事業がある。これらを年間 500 万ほどの小規模予算で行なっており、厳しいながらも熱い事業を展開している。

しかし、このような活動にもかかわらず、先に述べたとおり宇都宮がジャズのまちであるというイメージが定着しているとは言いがたいのが現状ではないだろうか。まちかどライブなどのイベントは継続されているが、ジャズのまちと感じるには頻度も規模も十分ではない。育成型、参加型事業は市民がジャズに触れる良い機会となるが、セミナーには 8 千円程度の費用がかかる。また参加型事業はミヤストリートギグのみで、ジャズ活動に参加したい市民にとっては機会が少なく、気軽さに欠けるだろう。

よって、これらのことからジャズを日常的に聴くことができる機会の不足、市民が気軽にジャズの活動に参加できる環境が整っていないことが問題であると考える。

(2)ジャズ関係のお店の現状

宇都宮市内には多くのジャズバーが点在しており、ジャズのまちの雰囲気を醸し出している。宇都宮ジャズ協会が作成したジャズマップには加盟店だけでも 10 店舗ほどのジャズバーがあり、非加盟店を含めると更に多くのジャズバーが存在している。

ところが、現存するジャズバーというのはあくまでジャズ好きの交流の場であり、誰もが聞きに行けるという気軽さに欠ける。ジャズ歴の浅い初心者はそのようなところに行きづらいものであり、ましてやジャズに興味がない市民が行くはずもないのである。しかし、ジャズのまち宇都宮を謳うからには、ジャズバーよりもより気軽に市民がジャズに親しめる場所が必要なのである。

よって、宇都宮にはジャズバーは多く存在するが、コアなファンではない市民が気軽に演奏を聞ける場所がないということが問題であると言える。

以上のことより、宇都宮においてジャズに触れ合う機会、場所が少ないということが確認できた。次の章では、この問題点を解決するための施策について、具体的には JR 駅東口整備事業におけるジャズ広場の設置提案について詳しく述べていく。

３．提案：Linking Park(仮称) の設置

(1)提案理由

最初に駅東口におけるジャズ広場設置という提案に至った背景を説明する。まず上記の現状分析と問題抽出を行なった結果、市民がジャズに触れ合う場所や機会が少ない、ということが最重要問題であるとの結論に達したことは先に述べた。そこで、その問題を解決するための施策を考えたところ、常にジャズを演奏していて、気軽に聴いていけるような雰囲気のいいジャズ広場を市街地に作ってはどうかという案が出た。また、そのときたまたま JR 駅東口の整備事業が行なわれていることを知り、詳細を調べた結果、まだ構想段階で詳しいことが決まっておらず、提案の余地があることが分かった。よって、駅付近ということで様々な利点が考えられるなどの理由から、駅東口整備事業にジャズ広場設置を組み込んでもらうことを提案することに至ったのである。

＜背景補足＞　「宇都宮駅東口地区整備基本計画」の現状

宇都宮駅東口地区整備基本計画は「21 世紀のまちづくりをリードする産業・情報・交流の新たなゲートシティ」を整備コンセプトとして、宇都宮市が計画し、進めているものである。現段階での計画内容としては、交通広場や歩行者デッキ、交流広場、バリアフリー施設などが挙げられている。今年度は事業化計画が策定され、土地区画整理事業への着手が行なわれており、2010(H22)年度完成予定としている。

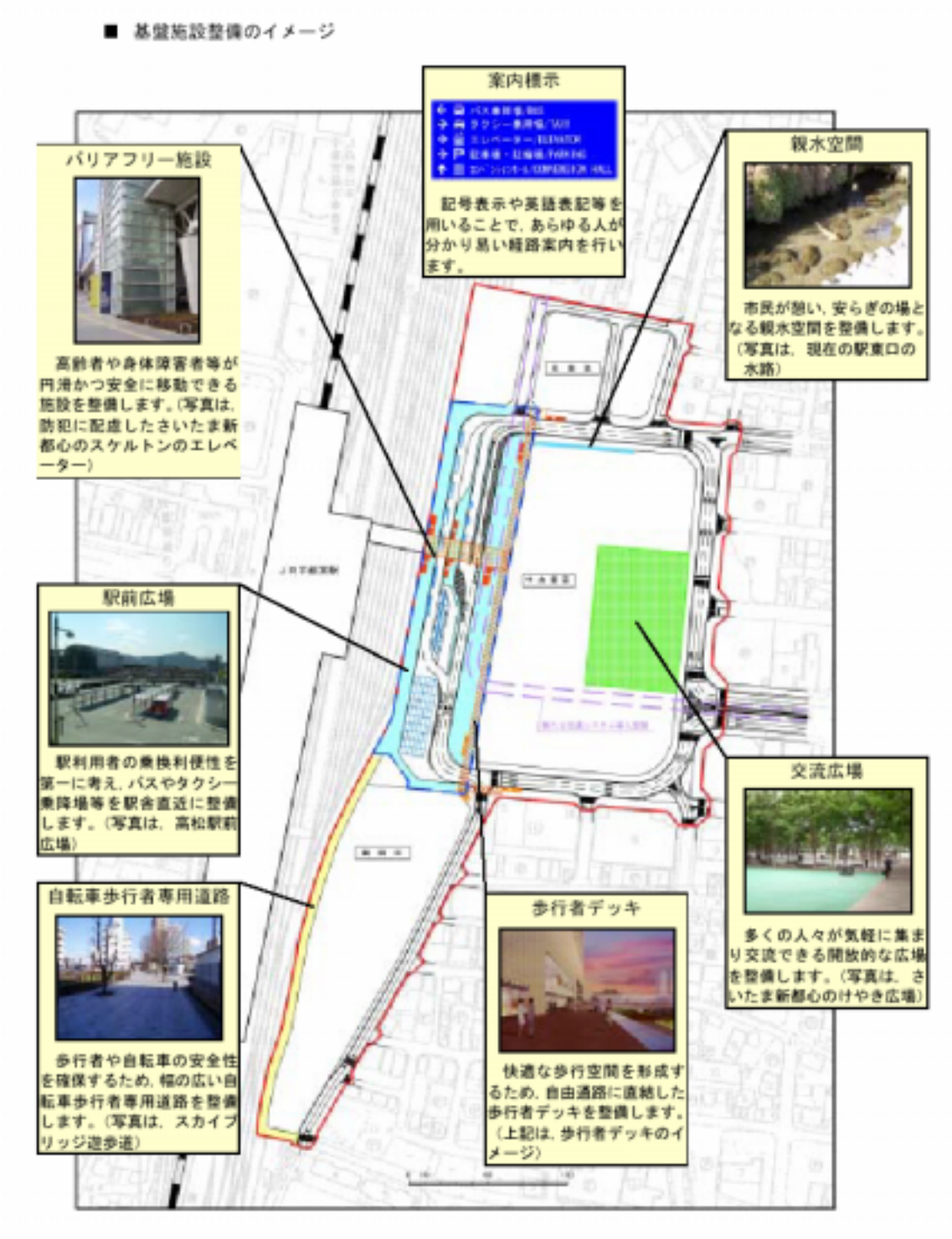
交流広場については、市民や来街者の交流を促進し、新しい文化の創造やまちの賑わいを創出する、水と緑に囲まれたシンボリックなオープンスペースとして位置づけており、具体的には、

① 県都の新しい玄関口としてふさわしい緑溢れる憩いの場
② 市民活動の発表や各種イベントの開催に利用できるスペース
③ まちの賑わいや魅力づけとなるカフェやワゴンによる物品販売にも対応できる場所

といったイメージで整備される予定である。

（整備計画イメージは次ページ図参照）

図１　駅東口整備のイメージ



「基盤施設整備のイメージ」

宇都宮市 HP 総合政策部「宇都宮駅東口地区整備基本計画」より転載

http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kikaku/jrhigashiguchi/machizukuri/kihonkeikaku.pdf

(2)施設内容

私たちは駅東口に整備される予定の交流広場に、以下の条件を備えた演奏スペースを設けることを提案する。

① 誰もが無料で、気軽に使える
② 時間を問わずいつでも音楽が流れている
③ 駅を利用する人がふらっと聴きに寄れる

(3)期待できる効果

次に、以上の施設を設置することで期待できる効果を挙げる。

まず一つ目は、常にジャズが流れている空間を設けることで、市民がジャズに接する機会が増え、ジャズに興味を持ってもらうことができることである。駅近くということで通行者も多く、また市外の人もかなり利用するため、内外にジャズのまち宇都宮をイメージ付けることができる。

二つ目は、演奏者にとって発表の場が広がるということである。普段はライブハウスやジャズバーなどのある意味閉鎖的な空間で演奏しているプレイヤーたちにとって、外で様々なお客さんを振り向かせるプレイをするというのは新たな刺激になるであろう。また奏者も観客も無料で利用できるということで、純粋に音楽を楽しむことができるし、多くの市民が普段の練習の成果を気兼ねなく発表できるのではないだろうか。

三つ目としては、駅東口付近の活性化があげられる。現在あまり賑わっているとは言いがたい東口駅前にこのような空間を設けることで、人の動きを取り戻し、駅前の寂れたイメージを払拭する。また休憩施設が充実していない駅前の状況も改善することができる。

(4)具体的な理想イメージ

上記の施策内容は最低限のベースであり、より魅力的なものにするにはこれだけでは足りない。また実際に設置するとなればより細かな計画が必要となる。実際にはその時点での市民との対話、予算の都合などで施策の詳細が決定していくのだろうが、ここでは、私たちの考えた理想イメージについて提案していきたいと思う。

まず先程挙げた条件の演奏スペースにプラスして、演奏を聴きながら食事が出来るようなレストラン・カフェスペースも併設するという提案である。演奏スペースだけを造り、演奏者に発表の場を設けても、やはり多くの人を引き込む効果としては弱く、音楽を楽しみたい人だけが集まって固定してしまうという考えも生まれてくるのではないだろうか。よって、レストラン・カフェを設置することで音楽だけを目的としない人でも、立ち寄りやすくなると同時に、食事をしながら自然とジャズに触れることが出来、結果的にそれが

宇都宮のジャズというものの浸透につながっていくきっかけとなると考える。さらに、宇都宮駅前という多くの人々が行き交う場所にこの広場、またレストラン・カフェを造ることで市内だけでなく、市外の人に対しても大きなアピールとなると考える。

また、この演奏スペースは屋内と屋外両方の案が考えられ、まず、屋外の場合の提案としては、ポイントとして観客にとっても演奏者にとっても開放感があり、散歩しながらでも公園でのんびり過ごしながらでもジャズを楽しめる気軽さがあるものとする。これにより、意識して音楽を聴こうとしていなくても自然と耳に入ってくることで、ジャズに興味な無かった層にもジャズに触れるきっかけを与えることが出来ると考えられる。そして屋内の場合の提案としては、ポイントとして防音効果があり、全天候・季節に対応出来るものとする。また、誰でも入る事が出来る気軽さ、そして外からもジャズの雰囲気を感じることが出来るように前面、または全面をガラス張りとする。これにより、いつでもジャズを感じることが出来るようになり、また中が見えるため、少し中に入ることに抵抗を覚える方でも入りやすさは増すと考えられる。

二つ目の提案は、昼と夜での演奏スペースの雰囲気を変え、同じ場所でもまた違う楽しみ方を生み出せるものを作るものである。例えば、昼は音楽のジャンルも演奏レベルも問わずに誰でも演奏することが出来、若い世代の人からお年寄りまで幅広い層の人々が気軽に演奏を楽しみながら同時にランチも楽しむことが出来る自由な明るい雰囲気の広場を作り出し、夜はプロの方や演奏レベルの高い方にジャズの生演奏してもらい、会社帰りの方やカップルなどがディナーを楽しみながらゆっくりとジャズに浸ってもらえるような落ち着いた大人の雰囲気の広場を作り出すというものである。

三つ目の提案として、この広場のプロデューサーを設けることである。もし公共施設としてこのような広場ができたら、その維持・管理をする者が必要となる。そこでこの広場の総合的なプロデューサーを設けることにより、コンセプトやテーマを決め、広場や付属施設の統一感を出すことができる。また、このプロデューサーを市民から募集することで、民間人の斬新なアイディアを取り入れることが出来ると考える。

図２《屋外イメージ》
カフェで和みながら、水上ステージでの音楽を楽しむ。ステージを外に設けることで、より多くの人に音楽を届けることができる。また、外から「入る」という感覚がないため抵抗なく音楽に足を止めることができる。

キャナルカフェ（Canal Cafe）http://eat-pota.cocolog-nifty.com/blog/cat615656/

図３《屋内イメージ》
屋内であるということで防音効果がある。また、前面ガラス張りにすることで開放的な空間での演奏を楽しむことができる。そして、屋内だが外から中の様子が伺えるので、演奏者も観客もより気軽に入ることができる。

美術館併設の喫茶店「カフェ　ウッドワン」
http://www.woodone-museum.jp/information/3-1%28caf

(5)課題

しかし、上記で挙げた私たちの考えるイメージの中にもいくつかの課題が残されている。

まず一つ目の課題は、常時音楽が流れていることによる騒音問題である。整備計画の中には共同住宅の建設も盛り込まれているため、特に夜間は住民への影響が懸念される。

二つ目は、広場を利用する客層、または演奏者が固定化してしまうのではないか、という恐れである。やはり若い世代の演奏者に若い世代の観客ばかりが、というように偏った世代が集まっていれば、他の層はなかなか気軽には入り込めない雰囲気が生まれてしまうのではないだろうか。そのような状況が生み出されては、私たちが本来の目標としている、宇都宮＝ジャズという認識もジャズに触れる機会も失われてしまうと考えられる。

４．結びに

今回私たちは、宇都宮におけるジャズによるまちづくりの認知度の低さを懸念し、市民がジャズに触れる機会を増やすということに焦点を絞って提案してきた。行政への市民参加が急速に進んでいる今、市民が自分のまちのまちづくりの方向性を知らない、共感できない、というのは非常に危険な問題だからである。餃子は後付けでまちのシンボルになったかもしれないが、ジャズではそうはいかない。例え何かのきっかけで産業として成功したとしても、市民の底力がなければあまりにも空虚なものになることは目に見えている。そういった意味で音楽によるまちづくりというのは非常に難しいと言えよう。音楽というものは、多種多様であり、人によって好みが全然違う、人間の欲望が色濃く出るところだからある。つまり市民のコンセンサスを得にくく、観光資源としても成り立ちにくいのだ。しかしその反面、市民の底力があれば、これほど如実に市民参加の成熟を表すものはない。音楽の盛り上がりがまちの盛り上がりとなり、その住民ニーズからさらに産業が発展する、という仕組みが出来上がるのである。今回の私たちの提案は、そのための必須条件である「市民の底力」を UP させるための第一歩として、非常に大きな役割を果たすものになると確信している。

また、前述したように、今回の研究は宇都宮市のジャズの定義に基づくものであったが、宇都宮市のジャズの定義をどう捉えるかについては、議論となった点でもある。宇都宮市ではクラシック以外の音楽はすべてジャズであると定義しているが、このように幅広く定義づけをすることがジャズのまちづくりをする上で正論であるとは一概には言えない。クラシック以外の音楽すべてをジャズということで対象の音楽の範囲が広がり、それに携わっている人も増えるために、ジャズを限定してしまうよりまちづくりを進めていくためには楽なのかもしれない。しかし、ジャズの範囲を広く捉えること、それは同時に宇都宮ジャズという音楽をぼやかしてしまう危険性も潜んでいると考えられる。

したがって、今後のまちづくりにおいては、音楽のまちという方向性でもって進み、その中でジャズならジャズを推し進めるという形を選択する方が、定義上の問題はなくなるのではないかと私たちは考える。その音楽のまちづくりの中で、今回私たちが提案するような、宇都宮に来たすべての人が音楽と触れ合うことができる機会や場所といったものを提供できるようなまちづくりを今後期待したいと思う。

なお今回は紙面の関係上載せられなかったが、他にもいくつかの提案を考えさせていただいた。研究室の HP に載っているので、興味のある方は是非ご覧頂きたい。理論的な検証の点でまだまだ問題は残るものの、学生の斬新なアイディアを募集するという今回のプロジェクトの趣旨には合致すると思われる。

宇都宮大学国際学部　中村祐司研究室 HP
http://gyosei.mine.utsunomiya-u.ac.jp/